

澁谷ゼミの基本方針と理念

澁谷浩

2017年4月12日

澁谷ゼミの基本方針と理念を学生が理解した上でゼミに参加できるように明文化します。

1. 澁谷ゼミの基本ルール

1. 発表（プレゼンテーション）は原則パワーポイントを使う
2. 発表時には、パワーポイントの配付資料（名前・年月日を明記）を全員に配布する
3. 発表者は「準備不足でした」という言い訳をしない（発表と議論はゼミ参加者への貢献）
4. ゼミでの議論に全員が積極的に参加する（議論の目的は協働作業を通じた創発、発想、発見）
5. 学生であるからには学業を優先する（バイトが理由で欠席は問題外）
6. 欠席は、対話を通じて「良い人間関係」を構築する機会を失うことを意味するので避ける
7. ゼミ中は、議論に集中するために、携帯を使用しない（学習目的で許可を与える場合のみ可）

ゼミの成績 = 基礎点（出席率）+ 評価点（ゼミ貢献度と卒業論文）

ここで、（1）基礎点（0～100点）は出席率（0～100%）で決まり、（2）評価点は、ゼミへの貢献度（発表、議論、ゼミ活動など）と卒業論文の評価で決まります。（ただし、平均的評価点＝0、すなわち平均的ゼミ貢献度と平均的卒業論文の場合には、評価点はプラス・マイナス0となります）

2. IT革命・AI革命による教育目的の変化 － 知識から知性へ（世界観）

IT革命によって教育のあるべき姿と目的が大きく変化しました。IT革命以前は、知識は手に入れるコストが高く稀少価値を持っていました。したがって、教育の目的は稀少価値がある知識を詰め込むことにある、という知識偏重型教育にある程度の合理性がありました。しかし、IT革命以後は、情報や知識に簡単にアクセスすることが可能になったので、知識それ自体の稀少価値は低下したのです。そこで知識の量より重要になってきたのが、いろいろな知識を現実世界で直面する問題解決のために活用する能力です。すなわち、現代社会においては、知識量と回答速度を測定するペーパーテストの点数（偏差値）を高く評価する今までの学力観はすでに時代遅れになったのです。これから必要とされる能力は、単なる知識の詰め込みではなく、わたしたちが直面している現実の問題を分析し、いろいろな知識を組み合わせて活用し、他者とのコミュニケーションを通じて共に学習しながら問題解決して行く能力です。すなわち、現代社会では、様々な知識を創発的に、様々な人々を協働的に活用することによって問題解決に導いていく知的能力が求められています。そのような知的能力を知性と呼ぶことにしましょう。

したがって、IT革命以後の教育の目的は、もはや知識を単に詰め込むことではなく、様々な知識を活用する知性を育成することに比重が移ったのです。にもかかわらず、入学試験を目標とする日本の学校教育は旧態依然とする知識の詰め込み、そしてペーパーテストの点数を上げるための受験技術の習得に比重を置いたままです。受験勉強だけでは受験用の知識と技術を習得できても、知性を身につけることができません。多くの読書を通じて批判的に読む訓練をしなければ「考える力」という知性が身に付かず、また創造的に文章を書く訓練をしなければ「自己表現」という知性を身に付けることもできません。そのような知性を大学に居る間に身に付けて置かなければ、卒業後の現実世界で多様な知識を活用して能動的に問題解決して行くことができないのです。すなわち、知性なしには新しい現実世界で積極的に創造的に主体的に働きながら生きていくことはできないのです。この歴史的方向性（トレンド）は、近い将来にやってくるAI革命によってさらに加速することになるでしょう。既成の知識に基づくプログラム可能な仕事は、人間の代わりに人工知能を備え付けたロボットが引き受けることになるからです。

澁谷ゼミの目的は、新しい現実世界で正しく生き抜く力を身に付けること、特に様々な知識を活用して問題解決するために必要な知性を身に付けることにあります。受験用の知識や技術は、現実世界で生きていくためにはほとんど役に立ちません。それは受験に特化した知識と技術であり、知性に基づいた本当の<実力>ではないからです。知性の高い人とは、学習能力の高い人に他なりません。知識偏重型学校では、既存の知識を勉強させることが目的であり、自発的に学習し新しく創造する能力を育成しているわけではありません。その結果、学校的価値に洗脳された人は、試験に出ないことは勉強すらしないし、自分で学習しながら問題解決することができないのです。したがって、澁谷ゼミの目的は、時代遅れの学校的価値の呪縛から脱出し、知性に基づいた真の<実力>を鍛えることでなければなりません。

3. 大学4年間、特に最後の10ヶ月の使い方（価値観）

受験勉強ではない本当の学問（主体的に「問いながら学ぶ」）は大学から始まります。知性に基づく本当の<実力>を身に付ける機会も大学から始まります。それでは、学校時代に強制させられた勉強ではなく、本当の<実力>を身に付けるために必要な「自発的な学習」を実践するには、大学4年間（特に、最後の10ヶ月）をどのように過ごせば良いのでしょうか？それを明らかにするために、まず日本の典型的な大学生の現状を確認することから始めましょう。その実態とは、だいたい次のようなものです。

（1）日本の多くの大学生はバイトしている。ほとんどの場合、遊びに使うお金を稼ぐためである。（海外のほとんどの大学生はバイトしない。バイトしていたら大学の授業についていけないから。）

（2）GPAは就職にとって重要でないので、授業は適当にサボり、レポートなんて提出前夜に書き殴る（海外の大学生にとってGPAは、大学院進学と専門職に就くためには決定的に重要です）。

（3）日本の大学生は夏休み暇を持てあますので、夏休み中にバイトと金儲けに深くはまってしまう。

（4）卒業に必要な単位はゼミを除いては3年間で習得しているが、4年次は、初めは就活でゼミ欠席、そして就活後はバイトでゼミ欠席する（日本の大学は実質3年制大学なので世界に通用しない）。

（5）ほとんどの学生は「一生に一度の自由に学べる大学最後の10ヶ月（6月～翌年3月）」をバイトなどで無駄にしている。この10ヶ月を有効に使って本当の<実力>を付けるかどうかで、その後の人生が大きく違ってくる。実際、<実力>の観点から見れば、この時間を有効に使えば浪人した学生は失った一年を取り返して余りある、逆に無駄に使えばもう一年浪人生活するのと同じ結果になる。

みなさんは、このような日本の典型的な大学生のライフスタイルで満足するのでしょうか？集団に埋没した凡庸な大学生でよいのでしょうか？ありきたりの大学生は、卒業後、会社組織に埋没した平凡なサラリーマンすなわち社畜にしかたれませんが、それでよいのでしょうか？一生に一度の自由に学べる10ヶ月をバイトで使ってしまうとよいのでしょうか？それとも、その10ヶ月を、長い人生を生き抜いていくために必要なく<実力>を身に付けるために使うのでしょうか？私たちが住んでいる現代社会では「知は力なり」です。IT革命後の時代においては、知性に基づく実力がないと、人材としての市場価値もない、組織でリーダーシップを発揮できる地位にもつけない、昇進も高給も獲得できません。学生時代に自分の時間をどのように使うかは、みなさんの自由です。みなさんの人生は、みなさんが選択するものであり、その結果と責任は自分以外のだれも代わって背負ってくれません。就活後の10ヶ月は、ほとんどの人にとって、人生におけるただ唯一の本当に「自由に学ぶことができる時間」です。その貴重な時間をバイトで失うのは実にもったいない。卒業したらいやでも働かなければならなくなるのに、必要もないバイトで学生時代の貴重な時間を放棄することはないでしょう。多くの学生は、二度と来ない「自由に学べる時間」を無駄に過ごしたことを、社会に出てから後悔することになります。

では、その10ヶ月をどのように使うべきでしょうか？ひとつの可能性は、集中して沢山の本や論文を読み優れた卒業論文を書くという時間の使い方が考えられます。卒業論文を書くという訓練は、組織に入ってから、プレゼンのみならず報告書や企画書を書く際に決定的に役立ちます。卒業論文を書くためには多くの読書と文章を書く訓練をしなければならないからです。同時に、卒業論文を書く過程を通じて、読書の楽しみ、文章を書く喜び、創造の楽しみ、自己表現の喜び、を大学時代に一度経験しておく

べきです。なぜならば、社会人になってからは、10ヶ月もの「自由に学べる時間」を得ることが不可能だからです。大学時代に「知的生活」を通じて＜実力＞を身につけていなければ、その後の人生は「日常生活」において他人に使われノルマをこなす社畜としての生き方しか残っていません。しかし、多くの学生は、「知的生活」の代わりにバイトで時間とエネルギーを使い果たし、携帯メールしか書いた経験がないためにまともな文章を書くこともできず、自分の潜在能力を十分に実現できていません。

4. 善い人生とは？ — 知性・共感・創造（人生観）

現代社会で個人が正しく生きて行くためには＜実力＞を身に付けていなければなりません。加えて、組織が繁栄するためにも＜実力＞を身につけている人材を採用することが必要になります。特に、組織のトップが真の＜実力＞を身に付けた人物ではなく、ゴマすり上手な処世術によってトップの座に就いた人物であれば、その組織は衰退します。同様に、短期決戦の就活では口先だけで面接官を上手くごまかすことができても、組織で実際に働いてみれば、文章がまともに書けないこと、読書で身につけた知性がないこと、創造的な仕事をする＜実力＞がないこと、がすぐばれます。就活は、悪く言えば「嘘つき大会での演技（茶番劇）」、良く言えば「建前と本音を上手に使い分ける必要がある現実社会への入り口」です。その現実社会の中で偽善に染まらず正しく生き抜いていくためには、悪い上司に逆らっても自立して生きていけるだけの信念と知性に基づいた実力（学習する力、考える力、判断する力、行動する力、創造する力、生きる力）が必要です。その＜実力＞を鍛える最大のチャンス、そして＜実力＞を維持するために必要な「知的生活」の習慣を身に付ける最後のチャンス、それが大学最後の10ヶ月です。

現代社会で生きるために必要な＜実力＞を身に付ける貴重な10ヶ月を、たかが数十万円（週6日働いたとしても100～200万円程度）を稼ぐためにバイトで失ってしまうのはさすがにもったいない。それは、ほとんどの人たちにとって、二度と手に入れることができない「自由に学ぶことができる時間」であり、長い人生を生き残るために決定的に重要な＜実力＞を身に付けることができる最高のチャンスです。実際、大学最後の10ヶ月を、多くの読書と優れた論文を作成するために集中して投入すれば、相当の＜実力＞を身につけることができます。同時に＜実力＞を維持するために必要な「知的生活」の習慣を身に付けることができます。本当は、借金してでも、この10ヶ月を自由に学ぶ時間として有効に使うべきです。バイトで得られるものよりも、バイトで失うものが圧倒的に大きいからです。実際、大学時代に＜実力＞を身に付けて、組織で出世コースに乗り管理職（マネジメント）になれば、組織の運営に積極的に参加できる、リーダーシップを発揮することもできる、仕事も主体的・創造的にできるようになるので面白くなります。しかも、管理職の生涯所得に比較すればスズメの涙にすぎないバイトで稼げる金額などは簡単に取り返して余りあります。そんなちっぽけな金のために、人生で唯一自由に学んで＜実力＞を身に付けることができる貴重な時間を犠牲にするのは、とても非合理的な人生選択です。

最後に、「善い人生」を生きるためには、知性に加えて共感能力と創造力が必要になることを指摘しておきましょう。ここまで、個人が現代社会で生き抜いていくためには知性に基づいた実力が必要になることを主張してきました。そして、そのためには学生時代に自由に学ぶことができる貴重な時間を有効に活用すべきであることを主張してきました。しかし、社会（世間）で成功することが必ずしも「善い人生」になるとは限りません。なぜならば、世俗的な成功すなわち金・地位・名声の獲得が人生目標となってしまうのは、虚栄をめぐる競争が社会で再生産されることになる結果、みんなが世代を超えて不幸になるだけだからです。「善い人生」とは、自分にとって幸せな人生であるのみならず、自分以外の人々も同時に幸せ（仕合わせ）にすることができる生き方を意味します。すなわち、「善い人生」のためには、共感能力を発揮して「良い人間関係」を構築することが必要です。なぜならば、「良い人間関係」が構築できれば、他者と協力して新しいものを創造することが可能になるからです。この創造の中には、私達が生きるために必要な財・サービスのみならず、社会、文化、組織、家庭、子供（子孫）なども含まれます。これらは全て私たちの創造活動（創造愛）が生み出したものです。しかも、新しい創造のために必要な協力関係を通じてお互いの信頼と愛情が生まれてきます。このような創造過程の繰り返しが「善い人生」を形創るのです。それが人間のあるべき「道」に沿った正しい生き方だと思います。

参考文献

1. みなさんは、受験勉強を通じて旧態依然（古色蒼然）とした「学校的価値観」を植え付けられ、大学で4年間を適当に過ごし、世間的にある程度知名度のある会社への就職も決った・・・かも知れませんが、「で?」「それで?」「これからの人生どうするの?」という問いに答えられますか?就職は新しい人生の始まりであり終わり（目的）ではありません。みなさんは、「で?」に応答していくための知恵とスキルを身に付けるための努力を学生時代にしましたか?日本で東大を頂点として成り立っている「学校化社会」の論理を内面化した人（すなわち、ほとんどの日本人）が、若いうちに、その価値観の特殊性（異常性）に気が付いて、自分自身の普遍的価値観を再構築する必要があると思います。そのために、

許光俊、「これから生き抜くために大学時代にすべきこと」、ポプラ社、2010年

加藤諦三、「大学で何を学ぶか」、ベスト新書、2009年（初版1979年）

吉野源三郎、「君たちはどう生きるか」、岩波文庫（青158-1）、1982年（初版1931年）

上野千鶴子、「サヨナラ、学校化社会」、ちくま文庫、2008年、

そして、「学校的価値観」を内面化してしまったみなさんの魂の脱植民地化(真の自分を取り戻す)を説く、
深尾葉子、「魂の脱植民化とは何か」、青灯社、2012年

安富歩・本條晴一郎、「ハラスメントは連鎖する-「しつけ」「教育」という呪縛」、光文社、2007年

安富歩、「生きるための経済学-＜選択の自由＞からの脱却」、NHK出版、2008年

安富歩、「生きるための論語」、ちくま新書、2012年

さらに、みなさんが日常生活している現場である日本社会と教育の構造的欠陥について、

森嶋道夫、「なぜ日本は没落するか」、岩波現代文庫、2010年（初版1999年）

尾木直樹、「取り残される日本の教育」、講談社α新書、2017年

を熟読して自分の置かれている現実について深く考えてみるべきです。そして、自分の学生生活、自分の人生、さらに自分を含む日本社会のあり方について再考すべきではないでしょうか。

2. 「日常生活」に埋没して「社畜」として一生を終るのではなく、より高次元の「知的生活」を通じて自ら人生を楽しむと同時に、現代社会で生き抜いていく＜実力＞を身に付けたい学生には、

渡部昇一、「知的生活の方法」、講談社現代新書、1976年

渡部昇一、「続・知的生活の方法」、講談社現代新書、1979年

佐久協、「高校生が感動した「論語」」、祥伝社新書、2006年

が役立つでしょう。

3. 創造的な卒業論文を書くためのヒントは、

外山滋比古、「思考の整理学」、ちくま文庫、筑摩書房、1986年

外山滋比古、「知的創造のヒント」、ちくま学芸文庫、筑摩書房、2008年

丸谷才一、「思考のレッスン」、文春文庫（ま-2-16）、文藝春秋、2002年

から得られるでしょう。その前に論文の書き方の基本について知りたければ、例えば、

石井一成、「ゼロからわかる大学生のためのレポート・論文の書き方」、ナツメ社、2011年

河野哲也、「レポート・論文の書き方入門（第3版）」、慶應義塾大学出版会、2002年

を参考にすればよいでしょう。

4. 創造性を発揮するための基本となるべき「発想（創発）法」については、

川喜田二郎、「発想法-創造性開発のために」、中公新書、1967年

川喜田二郎、「続・発想法-KJ法の展開と応用」、中公新書、1970年

が有益です。さらに「発想（創発）法」と「創造性（創造愛）」と「生き甲斐」と「チームワーク（仕合せ）」が実は構造的に繋がっていることを理解するには、

川喜田二郎、「パーティー学」、現代教養文庫（495）、社会思想社、1964年

が参考になります。この古典は「人はいかにして、生きがいを感じ得るか」「人と人の心はいかにすれば通じあうか」「人の創造性はいかにすれば開発できるか」という人生の根本問題に答える試みです。